

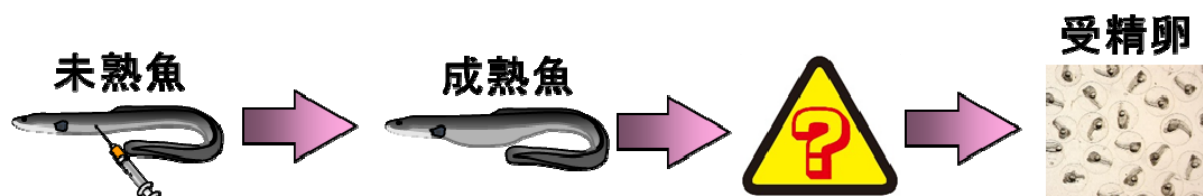
良質なウナギふ化仔魚確保のための 催熟技術改良研究

(予算区分 受託 研究期間 平成 29～32 年度)

担当：水産技術研究所浜名湖分場 田中寿臣

【研究の背景とねらい】

- ・国立研究開発法人水産研究・教育機構（以下、水産機構）は、これまでにウナギの種苗生産技術を開発し、世界で初めてシラスウナギの生産に成功するとともに、平成 22 年 4 月には、シラスウナギを親ウナギに育成して採卵、種苗生産する「完全養殖」に成功しました。
- ・しかし、その種苗（シラスウナギ）を大量生産して商業化するためには、複数の安定した技術が必要であり、実現されていません。その一つが、良質なウナギふ化仔魚を得るための催熟（人為的に成熟させること）技術の開発です。
- ・水産機構増養殖研究所では、今までに遺伝子工学的手法を用いた、組換えウナギ成熟誘導ホルモン（組換え濾胞刺激ホルモン：rFSH、組換え黄体形成ホルモン：rLH）を開発しました。
- ・本研究所では、これまでの研究においてそれらのホルモンを用いた催熟技術を開発し、安定して採卵できるようになりましたが、得られる卵質（ふ化率等）が不安定であり、催熟技術の改良が必要です。
- ・そこで、水産庁の「ウナギ種苗の商業化に向けた大量生産システムの実証事業」に参画し、水産機構増養殖研究所などと共同研究を行い、良質なウナギふ化仔魚確保のための催熟技術改良研究を行います。



イメージ：成熟魚の最終処理方法がカギか？

【期待される効果】

- ・催熟技術や安定採卵技術の改良により、仔魚の飼育実験に不可欠な良質な受精卵及びふ化仔魚を安定的に供給する技術が開発でき、ウナギ種苗の大量生産技術の完成につながります。

【年次計画】

小課題名	研究年度				研究内容
	29	30	31	32	
雌親魚の催熟条件の最適化	○	○	○	○	最終成熟時における投与物質やその時間等について検討する。

(作成 平成 29 年 4 月)